

特集

在宅医療

～住み慣れた場所で暮らす～

在宅医療とは、患者さんの自宅に医師が訪問して行う医療です。身体機能が低下し、通院が困難なときや、退院後、継続して自宅でも医療を受けることができます。在宅医療では、医師の指示のもと、それぞれの専門知識を持つ医療職等が連携し、患者さんの自宅等を訪問することで専門的なサービスを提供しています。

養老町において在宅療養を支える医師や看護師、介護職など専門職の関わりをご紹介します。



船戸クリニック 船戸 崇史 先生

「私が思う在宅医療とは」

船戸クリニック 医師 船戸 崇史

この地域での私の感じている在宅医療についてご紹介させていただきます。

在宅医療とは在宅に居ながら医療を受けられる事を言います。

さて、これからの時代で最も重要で誰もが必ず直面する問題は「自分の死」の問題です。実は「死」そのものは必ずしも「病気」だけが原因ではありません。ここ26年在宅医療を実践する中で、思いのほか「老衰」という「自然死」が多いものだと感じています。

人は病気がなくとも最後の最期は枯れるように亡くなっていきます。その姿を自然死と言います。こういう死に方は、在宅医療の中でだけあるとつくづく感じてきました。

「自分の死」の2つの問題

さて「自分の死」の問題は、更に2つに分けて考えることができます。

1) 「どこで死にたいか？」

死に場所には「自宅」、「病院」、「介護施設」しかないのです。皆さんはどこがよいですか？

ここで「自宅」と答えられた人に提供される医療が、在宅医療なのです。平成25年に国が行ったアンケートでは、国民の6割は住み慣れた自宅で最期まで過ごしたいと希望されました。私の在宅医療の経験では、在宅で最期までを実現するには介護者の了解と在宅診療に関わる医療者の存在が必要です。

ご家族が「最期まで自宅で介護」を覚悟してもらえなければ在宅医療は困難です。大切な人を看取るという初めて不安が大きい中での介護は、当然家族にとっても大きなストレスです。本人と家族は一体であり、本人が「自宅がいい」と言い、家族が「いいよ」と言って初めて実現するのです。

さらに、訪問診療・訪問看護・ケアマネジャー・訪問歯科診療・訪問薬剤師・ヘルパー（訪問介護）・リハビリ療法師・栄養士など幅広い訪問系の専門職がチームとなって関わる事も必須です。特に訪問看護は在宅医療の要であると思っています。